銀魂新訳紅桜編小説

アリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀魂新訳紅桜編小説

【Ｎコード】
Ｎ１５０６Ｔ

【作者名】
アリス

【あらすじ】
宇宙からやってきた最強の侵略者、天人（あまんと）
そのちからの前に幕府はなすすべもなかった。
廃刀令とその力の前に、全盛を極めた侍は衰退した。
そんななか、天人への攘夷（攘夷戦争）を決行し、サムライの魂を胸に秘めた３人の侍がいた。
その３人とは、高杉晋介、桂小太郎、坂田銀時の３人だった。
長い戦いの末に、３人は敗北した・・。
そして、多くの友を失った。

それから、数年経ち、銀時は万事屋(よろずや)を営み、
桂は攘夷活動を続け、
高杉は天人と幕府の破壊をたくらむ。
それからたった今、桂が突然行方不明になった。
おまけに江戸では辻斬りが横行している。
さらに銀時の元には、持つ人に災いを与える妖刀、「紅桜」の
捜索願いが舞い込む。
さて、どうなるのか？
銀時と桂は、高杉の魔の手から江戸を守れるのか？
さぁ、はじまりはじまり。

小説

銀魂の劇場版紅桜編の小説です。

かなり投稿遅れましたがどうぞ！

完結するのはかなり遅れるかもしれないけど、どうか、暖かい目で見守ってください。

111111111111111111111111111111

111

1111111111111111111111111111111

111111111111111111111111111111

11111

111111111111111111111111111111

111111111111111111111111111111

111111111111111111111111111111

111111111111111111111111111111

111111111111111111111111111111

111111111111111111111111111111

111111111111111111111111111111

1111111111111111111

プロローグ　始まりは桜とともに

???

「みなさんには、これから先さまざまな苦難や困難にぶつかるでしょう。

常にみなさんのそばにいられるかどうかはわかりませんが、

みなさんにこの言葉を贈ります。

・・・・・」

先生のような人物が話している中、

壁に一人の銀髪の子供が刀を持ち寝ていて、

ある机では、髪の毛を前で開いた子供は目を開き、

他の机では、退屈そうにした子供がいた。

この３人は、この後とてつもないことにぶつかるのも知らずに・・・。

そして時は流れ・・・。

江戸のとある場所。

???

「桂小太郎殿とお見受けする・・・・。」

桂

「人違いだな。」

???

「心配するな。

おれは幕府の犬でもなんでもない。」

桂

「人違いだと言っている！！！！！！！！」

???

「あいにく、俺もこいつも強者の血を欲していてね・・・・。」

そういうとカサをかぶった男は、刀を抜刀した。

桂

「貴様！その刀・・・！！！！！！！！！！！！！！！！！」

桂も刀を抜刀した。

だが・・。

桂

「・・・・・！？」

カサをかぶった男の動きのほうが早かった。

ブシュ・・・・！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

その日から桂は姿を消した。

そして、

その刀は赤く夜桜のように妖しい光を放っていた・・・。

第1話　舞い込んだ依頼（前書き）

桂小太郎（以下桂）が行方不明になって数日。
ある日突然エリザベスが万事屋に来た。
どうなるのか？

第1話　舞い込んだ依頼

坂田銀時（以下銀時）
「・・・・・・・・・・・・。」
神楽
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」
志村新八（以下新八）
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
」
エリザベス
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・。」
新八
「お茶です。」
ドンッ！
エリザベス
「・・・・・。」
新八
「何が言いたいの？
あの人。」
神楽
「新八、お前のだしたお茶自体が気に入らなかったアルよ。お客様は、お茶じゃなくて、珈琲派だったアルヨ。」
銀時
「この雰囲気、なんかまずくねぇか？」
新八
「珈琲です。」（怒りを含んだ声）
エリザベス

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」
銀時
「あのなぁ！
銀時が怒鳴ろうとした瞬間・・・・
ジリリリリ！！　電話が鳴った。
銀時
「あっ、電話だ。ちょっとでてくる。」
神楽
「こうなったら新八！
「あれ」を出すアル！」
新八
「え～。
でも「あれ」銀さんのだし。」
神楽
「いいアル。あいつには親がいない。
そういう奴だから、私たちが今はあいつの親代わりアル。そろそろ
あいつも乳離れさせなきゃ
いけなアルヨ！」
銀時
「ちょっと依頼が入った。
行ってくる。」
新八（心の声）
「嘘だよ。絶対嘘ついてこの場を逃げようとしてるよ！」
神楽
「おい、早くしろよ！」
銀時
「じゃな。あとはお前たちで何とかしろ。」
数分後
新八
「イチゴオーレでございます！｝

どんっ！
新八がいきおいよくコップをおいたため、中身がエリザベスにかかった。
エリザベス
「・・・・・。」
エリザベスは頭を下げて、イチゴオーレを見た。
（回想）
桂
「エリザベスよ。
武士は質素なものを口にしていればよい。
イチゴオーレだとかパフェだとか、そんな甘ったるいものばかり食べていると、
身も心も堕落してしまうぞ。」
（戻る）
エリザベス
「ぽちゃぽちゃ・・。」
新八
「泣いてる！
そんなにすきなのイチゴオーレ！」
神楽
「新八、よくやったある！」
さて、ここで中途半端ですが、続く。

第４話　紅桜（前書き）

万事屋にかかってきた依頼電話。
その依頼主の元へ向かう銀時であったが・・・。

第４話　紅桜

銀時は依頼を受け、依頼主の仕事場へやってきた。
銀時
「すいませーん。お電話いただきおうかがいしました。万事屋ですけど～。」
？？？
「ふん！ふん！」
がーん！がーん！
２人は刀を打っていてまったくこちらに気づいていない。
銀時
「すいませーーん。万事屋ですけど～～。」
銀時は声をあげて呼び込んだが、２人は全く気付かない。
銀時は声を最大にして叫んだ。
銀時
「すいませーーーーーーん！！！！！万事屋ですけどぉーーーーーー！」
次の瞬間・・・・。
銀時
「ぐはっ！！」
鍛冶道具が飛んできて、銀時の横っつら（顔面）に命中した。
所は変わって鍛冶屋の居間にて・・・。
鍛冶屋兄
「すまぬ！銀時殿！こちらも汗だくで仕事をしていたため、てが滑って・・・。
銀時（心の声）
「こいつら絶対聞こえてたよ！」
銀時
「それにしても、廃刀令のこのご時勢に刀鍛冶とは！なかなか大変

ですねぇ～。」
鍛冶屋兄
「では改めまして。私は兄弟で刀鍛冶を営んでおります！
こちらは、妹の鉄子！
鉄子
「ふん・・・。」
鍛冶屋兄
「こらぁ！鉄子！お前も挨拶せんかぁ！」
鍛冶屋兄
「早速ですが、依頼の内容を・・・。
依頼は、父の作った屈指の刀。紅桜　を探してほしいのです！」
銀時
「紅桜、とはどんな刀なんですかぁ！」
鍛冶屋兄
「紅桜は盗まれまして・・・。
しかぁし！紅桜は、けっして人が手をふれてはいけない妖刀！
父を皮切りに、紅桜にかかわるものは次々と死んでいった。」
銀時
「それは大変ですねぇ！」
鍛冶屋兄
「そこで銀時殿！紅桜が新たな災いを呼び起こす前に紅桜を見つけてほしいのです！」
銀時
「紅桜の特徴はなんですかぁ！」
鉄子
「兄者と話すときは、耳のそばによって、腹の底から声を出さなきゃだめだ。」
銀時
「お兄ィィィィさぁぁぁぁんんンん！！！聞いてるぅぅぅぅぅ！？」

鍛冶屋兄
「うるさーーイ！！！！！！！！！！！！！！」
銀時
「ぐはっ！！！！」
つづく

第４話　紅桜（後書き）

その日から物語を幕を開けた・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1506t/

銀魂新訳紅桜編小説

2011年10月9日01時07分発行